

回想機能の発達的变化

○瀧川真也¹・仲真紀子²

(¹川崎医療福祉大学医療福祉学部・²北海道大学大学院文学研究科)

キーワード：回想機能，加齢，日本語版 RFS

Developmental change of reminiscence functions

Shinya TAKIGAWA¹ and Makiko NAKA²

(¹Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare., ²Graduate School of Letters, Hokkaido University)

Key Words: Reminiscence functions, Developmental change, Japanese RFS

目 的

人は生きる上でのさまざまな場面で過去の体験を振り返る。Butler (1963) は回想を“過去の未解決な問題の解決を促す自然な心的過程”であるとしている。回想は青年期以降の幅広い年代で行われ、心理適応を高める効果があると考えられている (Ando, 2003; 野村・橋本, 2006)。

Webster (1993, 1997) は、回想のもつ機能について検討し、回想には“退屈の軽減”，“死の準備”，“アイデンティティ”，“問題解決”，“会話”，“親密さの維持”，“辛い経験の再現”，“情報・知識の提供”の 8 つの機能があることを明らかにした。また、彼らはこの結果から回想機能を測る尺度である Reminiscence Functions Scale (RFS) を作成した。日本では、瀧川・仲 (2013) が、RFS を用いて回想機能の因子構造を検討した結果、回想機能が 6 因子構造であることが示された。日本語版 RFS では原版の“アイデンティティ”と“問題解決”が合成され 1 つの因子(“自己成長”)となり、さらに“会話”と“情報・知識の提供”が 1 つの因子(“コミュニケーション”)となった。その他の因子は原版と同じものであった。

また、回想機能は年齢により主に用いられる機能が異なることが示唆されている。例えば、高齢期では、死を落ち着いて受け入れるため、若年期では他者との会話を深めるために回想を行うことが多いことがあげられる (Webster, 1993, 1997; Webster & Gould, 2007)。さらに、瀧川・仲 (2010) では、青年期はアイデンティティの確認や問題解決など、自己機能としての回想を多く用いることを明らかにしている。

しかし、日本では回想の発達的变化に関する研究は少ない。そこで本研究では、青年期から高齢期までを調査対象者とし、回想機能の発達の特徴について検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

調査対象者は 15-79 歳までの 729 名であった。回想機能の発達的变化を検討するため、参加者のうち 15-24 歳を青年期群 (M=18.5 歳, SD=2.5), 25-40 歳を成年期前期群 (M=32.7 歳, SD=4.4), 40-64 歳を中年期群 (M=52.2, SD=7.2), 65-79 歳を高齢期群 (M=70.7 歳, SD=3.8) とした。調査は Web 調査により行われた。

質問紙

回想機能を測るために、瀧川・仲・永田・金光 (2013) の日本語版 Reminiscence Functions Scale (RFS) を使用した。日本語版 RFS は 6 因子 40 項目で構成されており、回想目的について、6 件法 (1.まったくない～6.非常によくある) で回答を求めるものである。

結 果

加齢が回想機能に及ぼす影響を検討するために、RFS の 6 因子の得点について、年齢と性別の 2 要因の分散分析を行っ

た。その結果、“自己成長”では、中年期群、高齢期群に比べ、成人期前期群の得点が有意に高かった (それぞれ $p<.001$)。次に、“退屈の軽減”においては、青年期群、成人期前期群の得点は他の 2 群よりも有意に高かった (それぞれ $p<.001$)。“死の準備”については、高齢期群の得点が他の 3 群よりも有意に高かった (それぞれ $p<.001$)。そして、“親密さの維持”では、青年期群の得点が他の 3 群に比べ、有意に低かった (それぞれ $p<.001$)。また、女性は男性よりも有意に得点が高かった ($p<.001$)。“コミュニケーション”と“辛い経験の再現”は、年齢、性別の主効果および交互作用はみられなかった。

考 察

本研究の結果から、成人期前期ではアイデンティティの確認や現在の問題解決 (“自己成長”) を目的とし、高齢期では“死の準備”を目的として回想を行うことが多いことが示された。これは先行研究 (Webster, 1998; Webster & Gould, 2007) と一致する結果であった。次に、“親密さの維持”では、成人期前期以降の 3 群が青年期群よりも回想機能として用いることが示された。“親密さの維持”は、亡くなった人や疎遠になった人との関係確認のために回想を行うものであり、先行研究では中年期以降に多く利用される機能と考えられている。このことから、本研究は先行研究の結果を一部支持するものとなった。さらに、“退屈の軽減”は成人期前期以前の機能として多く用いられることが示されたが、この結果は Webster & McCall (1999) の結果と一致するものであり、若者が孤独の軽減を目的に回想を行っていると考えられる。

Webster (2003) は、RFS の 8 つの回想機能を“社会-自己”、“成長-喪失”の 2 軸で整理した (Table)。

	成長(順向)	喪失(逆向)
自己	アイデンティティ 問題解決	辛い経験の再現 退屈の軽減
社会	情報・知識の提供 会話	死の準備 親密さの維持
Webster (2003) より改変		

この分類を本研究の結果にあてはめると、青年期、成人期前期では、“自己成長”や“退屈の軽減”など主に自己機能を目的とした回想を行っている。一方で、中年期以降では、“死の準備”や“親密さの維持”など“社会-喪失”に分類される回想機能を用いている。以上のことから、回想機能は年齢により異なる特徴をもつことが明らかとなった。

引用文献

瀧川真也・仲真紀子・永田博・金光義弘. (2013). 日本語版 Reminiscence Functions Scale (RFS) 作成の試み(2). 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 738.
(本研究は平成 23 年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受け行われた)